

母子関係における質問紙法と描画法にみられる 母子関係の特徴のずれに関する実証的検討

高松優貴¹・喜田裕子²・石田 弓³

The empirical examination about a gap of the questionnaire method and the drawing method
in mother-child relationship

Yuki Takamatsu, Yuko Kida, and Yumi Ishida

One of the drawing methods is Mother and Child Drawings. This study focused on the gaps between the mother-child relationships measured by a questionnaire and the mother-child relationships interpreted from Mother and Child Drawings, and examined whether these differences were caused by the gaps between the conscious and subconscious attitudes. The results indicated that there was a negative correlation between the score on the Mother and Child Drawings and the stability score on the questionnaire as a general trend of the participants. Moreover, the result showed that the hypothesis was supported for both the congruous and incongruous groups with low rejection scores. It partially supported the notion that the subconscious attitudes could be reflected in Mother and Child Drawings, and that the conscious attitudes could be reflected in the questionnaire

Key words: Mother and Child drawing, Implicit Association Test (IAT)

問題

母子画 (Mother and Child Drawings) は Gillespie (1989) によって開発された描画法の一種である。母子画は対象関係論を理論的背景としており、母親像と子ども像がそれぞれ描き手の内的世界の自己表象と対象表象を反映し、母親像と子ども像の交流が自己と対象の交流を象徴する (馬場, 2005)。このことから、母子画において表現された母親像と子ども像の関係を読み取ることにより、描き手の愛着関係を理解することができると考えられる (馬場, 2005)。

実際に、母子画から得られる情報と愛着尺度で測定される愛着との関連を検討する研究が行われ

¹ 広島大学大学院教育学研究科

² 富山大学人文学部

³ 広島大学大学院教育学研究科附属心理臨床教育研究センター

てきている。馬場 (2003) は、母子画の個別指標と成人版愛着スタイル尺度 (詫間・戸田, 1988) で測定された愛着得点との関連を検討した。その結果、回避的な愛着スタイルを反映する avoidant 得点高群の女子大生は低群に比べ、母親像と子ども像のサイズが小さい母子像を描くこと、また、安定的な愛着スタイルを反映する secure 得点高群の女子大生は母子間で身体接触がみられる母子像を描くことが多いことが実証された。

しかしその一方で、愛着尺度で安定型の愛着スタイルを示す者でも、母子の表情が描かれず空白になっている母子画、母子間の距離が大きい母子画等、不安定な愛着が読み取れるような母子画を描く者も少数みられた。このような者は、母子画から得られる情報と尺度から得られる情報が矛盾する結果を示しているといえる。このことと関連して、依田・杉若 (2001) は、質問紙法による性格検査の結果と、投映法による検査から得られた情報とは、必ずしも一致しないことがあり、それはそれぞれのテストが、パーソナリティの違った側面を把握している可能性があるからであると述べている。また、一般に投映法では個人の無意識的側面が、質問紙法では意識的側面が測定できるとされている。以上のことから、尺度の測定結果と描画指標の評定結果とのずれが起る原因の 1 つとして両者が測定しているものの違いが挙げられ、こうしたずれは、単なる統計的誤差によるものではなく、参加者の意識と無意識のずれから生じるものなのではないかと考えられる。

このことについて検討するためには、参加者の意識していない態度について明らかにしたうえで、描画法と質問紙法の測定結果を比較する必要がある。そこで、本研究では、無意識的な態度を測定できるとされる潜在連合テスト (the Implicit Association Test ; IAT) を使用し、この点について検討することとした。IAT は、Greenwald (1998) によって開発された測定法であり、単語のグループ課題における概念同士の組み合わせの違いで生じる反応時間の差から、概念間の連合強度を測定する (藤井・上淵, 2010) 。IAT を潜在的態度の測度として使用する主な利点の 1 つは、参加者による意図的な結果の歪みが生じにくい点にある。アメリカにおける人種差別的態度をそれぞれ人種差別に関する尺度と IAT で測定した結果、尺度では測定されなかった差別的な態度が、IAT によって測定されることが示された (Greenwald, 1998) 。また、Greenwald (1998) の実験において、尺度と IAT の間には一部有意な相関が認められたが、全体的にはごく弱いレベルに止まった。このことは、意識的態度と無意識的態度は全体として無関係ではないものの、その一致度には個人差があることを示しており、IAT の妥当性を支持する結果と考えられる。さらに、IAT は他の潜在的測度と比較し、信頼性があり、施行が簡便で、強固かつ大きな効果量を生み出すことが可能であるとされるため、潜在的測度技術の中でもっとも一般的に使用されている (Karpinski & Steinman, 2006) 。よって本研究では、Greenwald, Nosek, & Banaji (2003) の IAT を改良して考案された、Single Category IAT (Karpinski & Steinman, 2006) を使用して実験を行う。Single Category IAT (SC-IAT) は、対となる概念を対象に連合強度を測定する IAT に改良を加え、単一の概念を対象に連合強度を測定することを可能にした測度である。本研究の場合、他の対概念と比較して母親に対する連合を測定するのではなく、母親という単一の対象概念に対する連合を測定したいと考えたため、SC-IAT を使用することとした。

本研究では、投映法である母子画が母子関係における無意識的側面を反映しており、質問紙が意

識的な側面を反映しているために、両指標間でずれが生じているのではないかという仮説を SC-IAT を用いて実験的に検証することを目的とする。

本研究の作業仮説は、以下のとおりである。尺度で測定される幼少期の母子関係と、母子画の印象から推察される母子関係の両指標間で違和感のない者（以下、一致群）は、SC-IAT の得点と尺度の得点、SC-IAT の得点と母子画得点の両者が一致していると考えられる。反対に、尺度で測定される幼少期の母子関係と、母子画の受ける印象から推察される母子関係の両指標間で違和感がある者（以下、不一致群）は、尺度の得点と SC-IAT の得点は一致しないが、母子画得点と SC-IAT の得点は一致することが考えられる。そのため、尺度の得点と描画得点の一致・不一致は、SC-IAT 得点によって有意に判別され、SC-IAT 得点は描画得点と同じ傾向を示すと考えた。

方法

参加者 本調査の参加者は A 大学所属学生 53 名（男性 16 名、女性 37 名）とした。参加者の平均年齢は、20.05 歳 ($SD=1.21$) であった。

期間 平成 23 年 7 月～平成 24 年 11 月であった。

SC-IAT

実験器具 実験に使用した装置は、ノートパソコン 1 台、デスクトップ 1 台、USB キーボード 1 台であった。また、SC-IAT は SuperLob-4.5 を使用し作成した。

手続き Zayas & Shoda (2005) の研究における第 2 実験の手続きと、Karpinski & Steinman (2006) の Single Category IAT の実験手続きおよび Greenwald (1998) の IAT の手続きを参考にし、Figure1 の手順で SC-IAT を実施した。なお、Karpinski & Steinman (2006) の Single Category IAT の実験では対象概念弁別課題が 1 度のみ、さらに 2 度目の混合課題の前の練習ブロックが省略され、全 5 ブロックで SC-IAT が行われていた。しかし、予備実験参加者の内省報告をもとに 2 度目の混合課題の前にも練習ブロックを加え、さらにカウンターバランスをとることとした。本研究で新たに付け加えた練習試行は、Greenwald et al. (2003) の IAT の実験手続きを参考にした。また、SC-IAT で用いる単語については、Atkinson, Leung, Goldberg, Benoit, Poulton, Myhal, Blokl, & Kerr (2009) を参考に刺激候補語を決定し、さらに新密度および情動価についての予備調査を行った結果決定された。

第 1・第 2 ブロックは、第 4 ブロック（本試行 A）の準備段階であり、パソコン画面上に呈示される単語（帰属概念）が快語か不快語か弁別した。快語が提示された場合は z のキーを、不快語が提示された場合はテンキーの 2 を押すように教示した。第 2 ブロックでは、呈示される単語（対象概念）が母親か非母親かを弁別した。刺激は、母親に関連する意味の単語（以下、母親関連語）と、非母親語として、母親以外に関連する意味の単語（お父さん、おとうさん、父親、友人、友達）を用い、z のキーとテンキーの 2 をそれぞれ割り当てた。キーの割り当ては、カウンターバランスをとった。試行数は、Greenwald(1998) を参考にし、第 1・2 ブロックともに 30 試行とした。

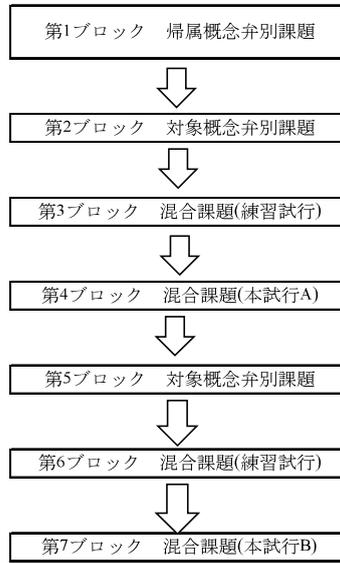


Figure 1
実験手続き

第3・4ブロックは、帰属概念と対象概念の潜在的連合を測定する手続きであり、第3ブロックが第4ブロックの練習試行として位置づけられている。なお、試行数については、Karpinski & Steinman (2006) を参考とし、第3ブロックは24試行、第4ブロックは72試行とした。母親関連語を2種類の帰属概念のどちらと同じキーに割り当てるかについてはカウンターバランスをとった。さらに、第4ブロックでは反応バイアスが起ることを防ぐために、正反応の58%がzのキーに、正反応の42%がテンキーの2に配分されるように、母親関連語：快語：不快語が、7:7:10の割合で提示された。これは、Karpinski & Steinman (2006) にしたがうものである。

第5ブロックは対象概念弁別課題であり、第7ブロック（本試行B）の準備段階として位置づけられる。課題内容は第2ブロックとほぼ同様であるが、割り当てるキーを逆転させて行った。試行数は、Greenwald (1998) を参考にし、30試行とした。

第6・7ブロックは混合課題であり、課題内容は第4ブロックと同じ課題であるが、割り当てるキーを変えて行った。第6ブロックを練習試行、第7ブロックをテスト試行とした。試行数は、Karpinski & Steinman (2006) を参考に、第6ブロックを24試行、第7ブロックを72試行とした。なお、母親関連語を2種類の帰属概念のどちらと同じキーに割り当てるかについてはカウンターバランスをとった。また、第4ブロックと同じ理由により、42%の割合でzのキーに正反応、58%の割合でテンキーの2に正反応が来るように、母親関連語：快語：不快語が、7:10:7の割合で提示された。

参加者の位置は、パソコンから65cmとした。また、実験ではzのキーとテンキーの2の2種類を使用し、zのキーは左手の人差し指で、テンキーの2は右手の人差し指で押した。それぞれの対象概念および帰属概念は、画面の中心に提示された。また、各ブロックでキーに割り振られた対象概念および帰属概念については、デスクトップ画面の上部にシールで貼って示した。画面に提示さ

れた単語は、参加者が反応するまで提示されていた。それぞれの反応の後に、参加者はフィードバックを受けた。フィードバックは、参加者が正反応をした場合、緑の○が画面の中心に 500ms 提示された。参加者が誤反応をした場合、赤色の×が画面の中心に 500ms 提示された。

母子画

調査材料 A4 のケント紙と 3B の鉛筆、消しゴム。母子画についての質問紙 (馬場, 2005)。

手続き 調査は、3, 4 名程度の小集団で行った。描画に関する質問等については口頭ではなく、すべて質問紙で回答させた。また、参加者同士の机の間隔は十分に空けて、参加者同士が影響を及ぼし合わないようにした。なお、質問紙の項目による影響を避けるため、描画、質問紙の順で調査を実施した。描画の実施の際は、紙を横向きに配布して行った。指示は Gillespie (1994) に従い、「お母さんと子どもの絵を描いてください」とした。描画が終了した参加者には手を挙げてもらい、「絵の中のお母さんと子どもは何をしていますか?」、「絵の中のお母さんと子どもはそれぞれ何を考えていますか?」という質問項目に自由記述で回答した。

就学前の母子関係に関する尺度 (酒井, 2001)

本尺度は、青柳・酒井 (1997) が、Ainsworth, Bleher, Waters, & Wall (1978) の幼少期の母子関係における独立した 3 つの愛着パターンの記述を参考に作成した 9 項目に、酒井 (2001) が新たに 20 項目を付け加えた尺度である (Table1)。「非常によくあてはまる (6)」～「全くあてはまらない (1)」の 6 件法。「就学前の安定的な母子関係」、「就学前の拒否的な母子関係」、「就学前のアンビバレントな母子関係」の 3 因子構造の尺度で、幼少期の母親との関係を想起して回答する。

Table 1
就学前の母子関係に関する尺度項目

就学前の安定的な母子関係	
私は母親のそばでは安心感があった	
母親と遊ぶのが楽しかった	
母親と出かけるのがうれしかった	
私は母親を好きだった	
私はよく母親に、ほめられた	
私は母親が何をしていますが、それに関心がなかった (R)	
就学前の拒否的な母子関係	
私は母親の愛情が薄いと思ったことがあった	
いつか見捨てられるのではないかと思った	
助けてほしいときに、母親は助けてくれないことがあった	
私が泣いていても、母親は関心がなかった	
私は同じことをしても怒られたり、怒られなかったりした	
就学前のアンビバレントな母子関係	
母親が出かけるときには、むりやりついて行こうとした	
幼稚園(保育園)に行っても、母親を思い出してずっと泣いていたことがあった	
親戚の家に遊びに行っても、親がいないとこわかった	
母親がそばにいないと、夜眠れなかった	
何かあれば、母親はすぐに来てくれると思っていた	

※Rは逆転項目を示す

結果

SC-IAT 得点および尺度値の算出

参加者ごとに SC-IAT 得点を算出した。SC-IAT 得点は、母親関連語+不快単語ブロックの反応時間の平均値 ($M = 517.95\text{ms}$, $SD = 73.31$) から母親関連語+快単語ブロックの反応時間の平均値 ($M = 613.\text{ms}$, $SD = 73.31$) を引いた値を SD で除すことで算出される。また、SC-IAT 得点の平均値は 0.76 点 ($SD = 0.43$) であった。なお、本研究においては、SC-IAT 得点が高いほど、母親に対してポジティブなイメージを持っていることを示す。

就学前の母子関係に関する尺度 (酒井, 2001) について、参加者ごとに、因子別の平均値および合計値を算出した (Table2)。なお、本研究の尺度値は、各因子に含まれる項目の合計得点とした。そして、幼少期の親子関係項目について、酒井 (2001) を参考に、「幼少期の安定的な母子関係因子」、「幼少期の拒否的な母子関係因子」の 2 因子に分けた。「幼少期のアンビバレントな母子関係因子」については、酒井 (2001) において α 係数の値が他の 2 因子に比べ低かったことに加え、安定的な母子関係因子との相関のみ高かった ($r = .33$) ことから、これ以降の分析からは除外した。

母子画の個別指標の評定

母子画の評定は、研究目的を知らない学生 2 名 (男性 1 名, 女性 1 名) が馬場 (2005) の基準に従い実施した。母子画の評定項目は、以下の Table3 に示した。なお、不一致個所については合議により決定した。 κ 係数を算出したところ、 $\kappa = .82$ となり、高い信頼性が得られた。評定者 2 名の一致率に関しては、以下の Table4 に示した。

馬場 (2005) を参考に、参加者ごとに母子画得点を算出した。これは、描き手の対象関係のおおまかな解釈を行うためのものである。母子画得点は、評定者が評定した母子画の個別指標の表情、身体接触、アイコンタクトをそれぞれ得点化し、それらを合計することにより算出しており、点数が高くなるほど描画者の対象関係が不良であることを示すものである。母子画得点の平均値は $M = 6.60$ ($SD = 2.21$) であった。

参加者全体における各得点の傾向

参加者全体の各得点の傾向を確認するため、SC-IAT 得点、母子画得点および幼少期の母子関係尺度の得点間の相関係数を算出した (Table5)。分析の結果、幼少期の母子関係尺度の安定得点と拒否得点間 ($r = -.43, p < .01$)、母子画得点と質問紙の安定得点間 ($r = -.32, p < .01$) にやや弱い有意な負の相関がみられた。

Table 2
質問紙の因子別の尺度値

	平均 (SD)	合計 (SD)
安定	4.60 (0.78)	27.51 (4.09)
拒否	2.39 (0.65)	12.02 (3.23)

Table 3
母子画の評定項目

個別指標	
表情	笑顔
	非笑顔
身体接触	あり
	なし
	その他
アイコンタクト	あり
	なし
	その他

Table 4
評定者の一致率

母子画 個別指標	表情		身体接触			アイコンタクト		
	笑顔	非笑顔	あり	なし	その他	あり	なし	その他
一致率(%)	93.75	91.67	100.00	93.33	50.00	56.25	69.23	28.57

Table 5
各得点間の相関係数

	1	2	3
1.SC-IAT			
2.安定	.14		
3.拒否	.04	-.43**	
4.母子画	-.16	-.32**	.17

** $p < .01$

母子画得点と尺度得点のずれに関する検討

分析を行うにあたって、参加者を尺度の安定得点、拒否得点別に、平均値を基準とした高・低群に群分けした。さらに、酒井 (2001) および馬場 (2005) を参考に、参加者を意識的態度と無意識的態度が一致している一致群、意識的態度と無意識的態度が一致していない不一致群に分け、分析を行った。群を分ける際の基準について、以下に詳細を述べる。

まず、尺度の安定得点高群に該当する者で、母子画得点が6点以下の場合、安定得点高群における一致群とした。同様に、安定得点高群に該当する者で、かつ母子画得点が7点以上の場合、安定得点高群における不一致群とした。尺度の安定得点低群に該当する者で、かつ母子画得点が7点以上の場合、安定得点低群における一致群とした。同様に、安定得点低群に該当する者で、かつ母子画得点が6点以下の場合、安定得点低群における不一致群とした。

尺度の拒否得点高群に該当する者で、母子画得点が7点以上の場合、拒否得点高群における一致群とした。同様に、拒否得点高群に該当する者で、かつ母子画得点が6点以下の場合、拒否得点高群における不一致群とした。尺度の拒否得点低群に該当する者で、母子画得点が6点以下の場合、拒否得点低群における一致群とした。同様に、拒否得点低群に該当する者で、母子画得点が7点以上の場合、拒否得点高群における不一致群とした。

投映法である母子画が描き手の無意識的な側面を反映しており、質問紙が回答者の意識的な側面を反映しているために、両指標間でずれが生じているのではないかという仮説をSC-IATを用いて検証するため、SC-IAT得点を独立変数とし、一致群・不一致群を判別する判別分析を行った(Table6)。

安定得点を基準とした場合の判別分析を行った結果、安定得点高群の判別率的中率は71.4%と比較的高い値が得られたが、統計的に有意な結果が得られなかった($A=.12, n.s.$)。安定得点低群は、統計的に有意な結果が得られなかった($A=.40, n.s.$)。また、判別率的中率は46.9%であった。

拒否得点を基準とした場合の判別分析を行った結果、拒否得点高群では、統計的に有意な結果が得られなかった($A=.78, n.s.$)。判別率的中率は、52.9%であり、統計的に有意な結果は得られなかった。拒否得点低群では、判別率的中率は63.2%であり、統計的に有意な結果が示された($A=.05$)。

Table 6
描画得点と質問紙得点の一致・不一致群における判別分析

	質問紙安定得点を基準とした場合			
	安定得点高群 ($n=21$)		安定得点低群 ($n=32$)	
	一致 (16)	不一致 (5)	一致 (21)	不一致 (11)
SC-IAT得点 (M)	0.83	0.62	0.76	0.84
判別化係数	1.00	1.00	1.00	1.00
グループ重心	0.19	-0.63	-0.11	0.21
判別率的中率	71.4%		46.9%	
Wilks's A	$A=.12 (n.s.)$		$A=.4 (n.s.)$	
	質問紙拒否得点を基準とした場合			
	拒否得点高群 ($n=34$)		拒否得点低群 ($n=19$)	
	一致 (18)	不一致 (16)	一致 (11)	不一致 (8)
SC-IAT得点 (M)	0.76	0.80	0.87	0.48
判別化係数	1.00	1.00	1.00	1.00
グループ重心	0.05	-0.05	-0.41	0.57
判別率的中率	52.9%		63.2%	
Wilks's A	$A=.78 (n.s.)$		$A=.05$	

考察

参加者の全体傾向

まず、参加者の各得点の全体的な傾向を確認するため、尺度の安定得点・拒否得点と母子画得点、SC-IAT 得点の間で相関係数を算出した。その結果、母子画得点と安定得点の間にやや弱い有意な負の相関がみられた。これについては、馬場 (2005) の知見と一致していた。馬場 (2005) は、母子画に表現された母親像は母親との関係を通じて内在化された心の中の母親であると指摘している。また、安定的な愛着関係の形成には母親の敏感で応答性の高い世話が必要不可欠であり、逆に応答性の低い接し方を母親が行った場合、子どもの愛着関係は不安定なものとなる (Hazan & Shaver, 1987)。よって、子どもの頃に成立した心的な愛着表象が将来の愛着関係に影響を与えるとすると、幼少期の母子関係が安定的であると考えている者は、心的な愛着関係、つまり対象関係も良好であると考えられる。よって、安定得点が高い参加者の母子画の母子像には、こうした安定的な対象関係が表れやすいと考えられる。

母子画と就学前の母子関係に関する尺度にあらわれる母子関係のずれに関する検討

次に、投映法である母子画が無意識的な側面を反映し、質問紙が意識的な側面を反映しているために、両指標間でずれが生じているのではないかという仮説を検討するために、尺度の因子別に高・低群に分け、SC-IAT 得点を独立変数とし、一致群・不一致群を判別する判別分析を行った。結果について、尺度で測定される幼少期の母子関係と、母子画の印象から推察される母子関係の両指標が一貫している一致群は、尺度の得点、SC-IAT の得点、母子画得点の3つの指標が一致した測定結果を示していると推測していた。反対に、尺度で測定される幼少期の母子関係と、母子画から受ける印象から推察される母子関係の両指標間に違和感がある不一致群は、尺度の得点と SC-IAT の得点は一致しないが、母子画得点と SC-IAT 得点は一致した結果を示すと推測していた。

分析の結果、拒否得点低群において、仮説を支持する方向の結果が示された。つまり、尺度において幼少期の母子関係が拒否的ではないと回答し、かつ安定的な母子関係が想定される母子画を描いた参加者は、母親に関する無意識レベルのイメージもよりポジティブであったということが示された。逆に、尺度において幼少期の母子関係が拒否的ではないと回答しており、かつ安定的ではない母子画を描いた個人は、母親に関する無意識レベルのイメージもポジティブではないということが示されたといえる。これらの結果は、質問紙には意識的な側面が、投映法である母子画には無意識的な側面が反映されるという仮説を部分的に支持する結果であった。このことに関連し、投映法である母子画にはその人の意識面だけではなく無意識的側面が多く現れるといわれている (藤井・山根・河合・切田・澤谷・平峯・名島, 2009)。また、安定型の愛着スタイルを持つ個人は、未解決の感情や思考がなく、過去から現在におよび愛着に関わる事柄を客観的に見ることができるといって特徴を有している (Rholes & Simpson, 2004; 遠藤・谷口・金政・串崎訳, 2008)。これらのことから、拒否得点低群における一致群の参加者は、過去の母親と関係のなかで安定した対象表象を形成できており、それが描画に表れたのではないかとと思われる。また、不一致群の結果に関連して、描画の

非言語的な性質は、評価するのが難しい感情と態度を表現させやすくさせるといわれている (Fury, Carlson, Srouf, 1997) ことから、不一致群の参加者は尺度には意識的な防衛を働かせたが、無意識的な側面は防衛ができなかったため、無意識的な側面が母子画に反映されたのではないかと推察される。しかし、以上の推察については本研究で検討することができていないため、今後検証していく必要があると思われる。

次に、安定得点高・低群、拒否得点高群においては、有意な結果が示されなかった点について述べる。安定得点高群については、判別の中率が 71.4%と高いが有意な結果が示されておらず、これはサンプル数が少なすぎたためと思われる。よって、今後サンプル数を増やすことで有意な方向を示す結果が得られる可能性があるが、本研究ではその点について検討することはできないため、今後の課題となるとと思われる。

また、有意な結果が示されなかったことに関して、別の要因も考えられる。拒否得点高群および安定得点低群には、幼少期の母子関係が拒否的なものであった、もしくは安定的なものではなかったと回答している参加者が含まれている。本研究においては、こうした参加者の愛着は、拒絶・回避型であるだろうと想定していた。しかし、成人愛着における拒絶・軽視型の個人は、子ども期における自らの脆弱性やアタッチメント対象からの拒絶にまつわる記憶を抑圧し、アタッチメント関係の重要性を否定することによって、アタッチメント対象からの慰撫とサポートに対する欲求を不活性状態に保とうとする傾向がある (Rholes & Simpson, 2004 ; 遠藤・谷口・金政・串崎, 2008) 。さらに、不安定な愛着を持つ個人は、脅威的な性質を持つ情報を無視したり避けたりする傾向がある (Emmichoven, Ijzendoorn, Ruiters, & Brosschot, 2003) 。よって、実際に拒絶・回避型の愛着スタイルである者は、例え過去に拒否的な母子関係を経験していたとしても、それを表出することに抵抗があった可能性がある。さらに、人物画は参加者に警戒心を抱かせ、自己を防衛しようという気持ちを高めるため、意識的あるいは無意識的に歪曲した表現をされることがあり、この傾向は特に自己を隠そうとする性格の者に多い (高橋, 1974) 。よって、幼少期の母子関係が拒否的であったことを、防衛することなく尺度や母子画に表出できる個人は、過去の拒否的な関係についても現在は自身の中で受け入れることができているのではないだろうか。したがって、このような個人の愛着は過去には拒絶・回避型であったとしても、現在は安定型に変化している可能性がある。よって、尺度は過去の母子関係について問うものであり、SC-IAT は現時点の母親へのイメージを測定するものであったため、現在と過去の母子関係のとらえ方に変化が見られる個人についてはずれが生じており、仮説とは異なる結果が示されたのではないだろうか。

本研究において、描画に描き手の無意識的なイメージが投影されている可能性を部分的であるが実証的に示唆できた点は、有意義であったと思われる。描画の研究はバラエティに富んでいるが、すぐに活用できるような結果が得られるのはまれである (Wallon, Cambier, Engelhart, 1990 ; 加藤・日下訳, 1995) 。そのために、描画については臨床的経験による直感によってのみ診断が下されることになるが、そうした直感は検証できないことが多い (Wallon, et al., 1990 ; 加藤・日下訳, 1995) 。このようなことから、描画の研究は真に確かなデータを提供するものは少ないという指摘もある (Miljkowitch & Irvine, 1982) 。しかし、本研究において、統計的に有意な結果が得られた部分は少な

かったものの、すべての群において、尺度の得点と母子画得点の一致・不一致に関わらず、SC-IAT得点と母子画得点は同じ傾向を示していた。つまり、実験者以外の評定者による母子画の評定結果と、SC-IATで測定される母親へのイメージは重なりうるといえる。このことから、母子画には描き手の母親イメージが投射され、かつ他者がそれを読み取ることは可能であるということが示唆されたといえるのではないだろうか。

本研究の課題と限界

本研究の問題点として、群分けの問題、母子画の評定の問題、母子画が意識と無意識の両方を反映している可能性の3点が考えられるため、以下で述べていきたい。

群分けの問題について、本来は安定得点と拒否得点の両方を加味した群分けを行う予定であったが、サンプル数が足りず、やむなく因子別の高・低群で群分けを行った。このことから群分けが複雑になってしまったという点も、本研究の課題であったと思われる。

次に、母子画の評定の問題に関して述べる。本研究では、量的な分析を行うため、馬場 (2005) の基準にしたがい、それぞれの母子画を得点化した母子画得点を算出した。母子画得点は、母子画の解釈において特に重要と思われる個別指標である、母子画に描かれた母子の表情、母子間の身体接触、母子間のアイコンタクトの3点から算出されている。しかし、描画においては個別指標のみではなく、全体的な印象もまた重要視されている (青木, 1980) が、この点については母子画得点に反映されていない。したがって、個別指標のみに着目すると安定的な母子画でも、全体として眺めた場合には、必ずしも安定的ではない印象を与える可能性が考えられる。しかし、母子画得点のみではこうした母子画の特徴が捉えきれなかった可能性があり、大多数の母子画は母子画得点で特徴を捉えることができている、一部の母子画は難しかったのかもしれない。このような一部の母子画が、結果に何らかの影響を及ぼした可能性がある。

最後に、母子画が意識的な態度と無意識的な態度の両方を反映していたという可能性について述べたい。描画は無意識的な態度を反映しているという一方で、意識的な態度と無意識的な態度の両方を反映しているという指摘も多い。描画を描くという行為それ自体は意識的になされるものであり、無意識だけ反映されるとは考えにくい。このことに関して、青木 (1979) は、描画は無意識「のみ」ではなく、無意識「も」反映しようとするのが妥当であると述べている。また、人物画は意識的あるいは無意識的に歪曲した表現をされることがある (高橋, 1974) という指摘もあり、質問紙のみではなく描画にも、意識的な防衛を働かせる個人がいた可能性は十分あり得る。したがって、本研究で描画は無意識を反映するものとして設定した点には問題があったのかもしれない。今後はこの点について改善した、さらなる実証的検討が必要であると思われる。

引用文献

Ainsworth, M. D. S., Bleher, M. C., Waters, E., & Wall, S. (1978). Patterns of attachment : A psychological study of strange situation. Hillsdale, N. J. : Lawrence Erlbaum Associates, Inc.

- 青木健次 (1979). 投影描画法研究の動向 京都大学教育学部紀要, **25**, 209-222.
- 青木健次 (1980). 描画法における全体的印象について 京都大学教育学部紀要, **26**, 129-140.
- Atkinson, L., Leung, E., Goldberg, S., Benoit, D., Poulton, L., Myhal, N., Blokland, K., & Kerr, S. (2009). Attachment and selective attention : Disorganization and emotional Stroop reaction time. *Development and Psychopathology*, **21**, 99-126.
- 馬場志津 (2003). 母子画の基礎的研究 成人版愛着スタイルとの関連から 臨床描画研究, **18**, 110-124.
- 馬場志津 (2005). 母子画の基礎的・臨床的研究 北大路書房
- Emmichoven, I. A., Ijzendoorn, M. A., Rutter, C., & Brosschot, J. F. (2003) . Selective processing of threatening information : Effects of attachment representation and anxiety disorder on attention and memory. *Development and Psychopathology*, **15**, 219-237.
- 藤井 勉・上淵 寿 (2010). 潜在連合テストを用いた暗黙の知能観の査定と信頼性・妥当性の検討 教育心理学研究, **58** (3) , 263-274.
- 藤井優子・山根 望・河合可南子・切田祐子・澤谷拓哉・平峯朋子・名島潤慈 (2009) . 母子画に関する諸研究の概観 研究論叢 芸術・体育・教育・心理, **3**, 261-267.
- Fury, G., Carlson, E. A., & Sroufe, L. A. (1997). Childrens representations of attachment relationships in family drawings. *Child Developngs*, **68** (6) , 1154-1164.
- Gillespie, J. (1989). Object relations as observed in projective Mother-and-Child Drawings. *The Arts in Psychotherapy*, **16**, 163-170.
- Gillespie, J. (1994). *The Projective Use of Mother and Child Drawings*. New York : Brunner / Mazel.
(松下恵美子・石川 元 (訳) (2001) 母子画の臨床応用 ——対象関係論と自己心理学—— 金剛出版)
- Greenwald, A. G. (1998). Measuring individual differences in implicit cognition ; The Implicit Association Test *Journal of Personality and Social Psychology*, **74** , 1464-1480.
- Greenwald, A. G., Nosek, B. A. & Banaji, M. R. (2003). Understanding and Using the Implicit Association Test : I . An Improved Scoring Algorithm *Journal of Personality and Social Psychology*, **85**(2), 197-216
- Hazan, C., & Shaver, P. (1987). Romantic love conceptualized as an attachment process *Journal of Personality and Social Psychology*, **52** (3) , 511-524.
- Karpiski, A., & Steinman, R. B. (2006). The Single Category Implicit Association Test as a measure of implicit social cognition. *Journal of Personality and Social Psychology*, **91** (1) , 16-32.
- Miljcowitch, M., & Irvine, G. M. (1982). Comparison of drawing performances of schizophrenics, other psychiatric patients patients and normal school-children on a draw-a-village task. *Arts in Psychotherapy*, **9**, 203-216.
- Rholes, W. & Simpson, J. (2004). *Adult Attachment : Theory, Research, and Clinical Implications*. New York : The Guilford Press.

- (遠藤俊彦・谷口弘一・金政裕司・串崎真志 (訳) (2008). 成人のアタッチメント—理論・研究・臨床— 北大路書房)
- 酒井 厚 (2001). 青年期の愛着関係と就学前の母子関係—内的作業モデル尺度作成の試み— 性格心理学研究, **9** (2), 59-70.
- 高橋雅春 (1974). 描画テスト入門—HTP テスト— 文教書院
- Wallon, P., Cambier, A., & Engelhart, D. (1990). *Le Dessin de L'enfant*. Paris : Presses universitaires de France.
- (加藤義信・日下正一 (訳) (1995). 子どもの絵の心理学 名古屋大学出版会)
- 依田麻子・杉若弘子 (2001). 第 1 章心理アセスメント序説 上里一郎 (監) 心理アセスメントハンドブック 西村書店 Pp3-7.
- Zayas, V., & Shoda, Y. (2005). Do automatic reactions elicited by thoughts of romantic partner, mother, and self relate to adult romantic attachment? *Personality and Social Psychology*, **31**, 1011-1025.